

連載 「変わりゆく高等教育」 第1回

米国の知られざるエリート・オンライン全寮制大学

Minerva（ミネルヴァ）

a.k.a.ミンミン

はじめに

元大臣の大学教員による授業に反対して、立て看板を掲げビラをまいた学生が大学と揉めているニュースが、先日マスコミを賑わせていた。そんな小さなことに、しばしば人はこだわり、自分たちを取り巻く大きなことには気もつかずにいる。ニュースを聞きながら、そんな一教員に関わる問題より、この学生も含めて全国の大学生が一丸となって主張すべきもっと重要なことがあるだろ、と私は感じていた。それは「なぜ（サラ）リーマンと一緒に朝の満員電車に乗って学校にやっとたどり着いて、大教室でつまらない授業受けなきゃいけないの？こんなのネット配信でやっても良くね？質問もネットの方が簡単だし。大学は非効率な学び方を学生に強要し、学生の時間を浪費させ損害を与えているんじゃないの？」という、（私が思うに）学生としては極まっとうな主張である。日本中の大学生は大まじめにそう主張していい。

読者が教員だとしよう。あなたの授業で本当に学生を同じ時間に同じところに物理的に集めて対面で授業しなければならない必然性のある内容はどの程度あるのか？自分の教えている科目でMOOC（次回で紹介）のコースを学生の立場になって受講したことがあるだろうか？全ての読者に学生の頃を思い出してほしい。あなたの（遠い昔の）大学生の頃の授業で、本当に教室にいて良かったと思える授業はどの程度あっただろうか？実験や解剖や対話を重ねていく授業なら別だが（もちろんこれらもテクノロジーで代替されていくが）、ただの知識の伝達や議論であれば、もう

ネット経由で十分なのではないか？

物言わぬ大学生たちは（そしてほとんどの大人も）、中世以来連綿と続いてきた学校の伝統に呪縛され、子供が小学校や中学校に通うがごとく大学に物理的に通うことに何の疑問も持っていないだろう。伝統とは学生からすれば、（教師に）決められた時間に、（教師に）決められた場所に物理的に集まって、（教師に）決められた勉強を、しばしば大教室で、受身で受講し、（教師に）決められた時に試験を受け、（教師に）単位を認めてもらう、というものだ。



いつまでこんな無駄を強いるのだろうか？

昭和の時代ならば、大学は学生を従順で同調圧力に敏感なホワイトカラーサラリーマンや工場労働者として躡ける装置と理解できるのかもしれない。しかし学生のほとんどは、いまや生まれた時からネットのつながっていたデジタルネイティブであるし、変化の激しい時代にあつては経済界もそんな昭和的に従順だけの学生は求めているだろう。5G が来年から本格的に始動しようとしている時、そして AI の進歩が加速している中、日本の大学も世界の大きなうねりから目を背け続け、ガラパゴス島に安住し、鎖国し続けているわけにはいかないであろう。

今回は数回にわたって、特に米国を中心に始まっているテクノロジーによる高等教育の変革の大きなうねりへと読者を誘い、また考えていただくために、読者の「普通」に揺さぶりをかけて行く予定である。この変革はグローバルに影響を及ぼすものであるが、それだからこそローカルな要素も際立ってくることがあり、時折、グローバルとローカルの対比にも触れていきたい。筆者は高等教育業界の片隅にいる者であるが、現実をあからさまに紹介すること自体で、所属する組

織の利益やそこでの自分の役割と相反する部分も出てきてしまう為（組織の中で議論しているなら自由だが、対外的に発信するとなると混乱を招く恐れがある為）、あえて仮名で投稿させていただくこととする。

基本的に教育機関としてのほとんどの日本の大学は、サービス提供のシステムとしてはオワコンなのである。日本語による保護と情報の非対称性（つまりは直接の受益者である学生やその親が世界の趨勢を良く知らない、したがって大学側から良質なサービスが出てこない）によって、かろうじて生きながらえている状態だと認識している。ほとんどの日本の大学に今後 10-20 年程度で存在価値は無くなるが、当座は日本語という言語のあるおかげで、また学生（と大学人と親と企業を含めた世間一般）の無知の為に、また文部科学省の政策の為に、消滅する運命にあるものが生きながらえている状態だと認識している。特に今後の AI による翻訳技術の進歩により、日本の大学の死期は確実に近くなっている。ただ少数の優れた大学はますます発展するだろうし、世界の有名大学のサテライト校のようになる大学も出てくるだろう。また、秋葉原のアイドルように生き残る大学も出てくるだろう。詳しくは次回で取り上げる予定だ。

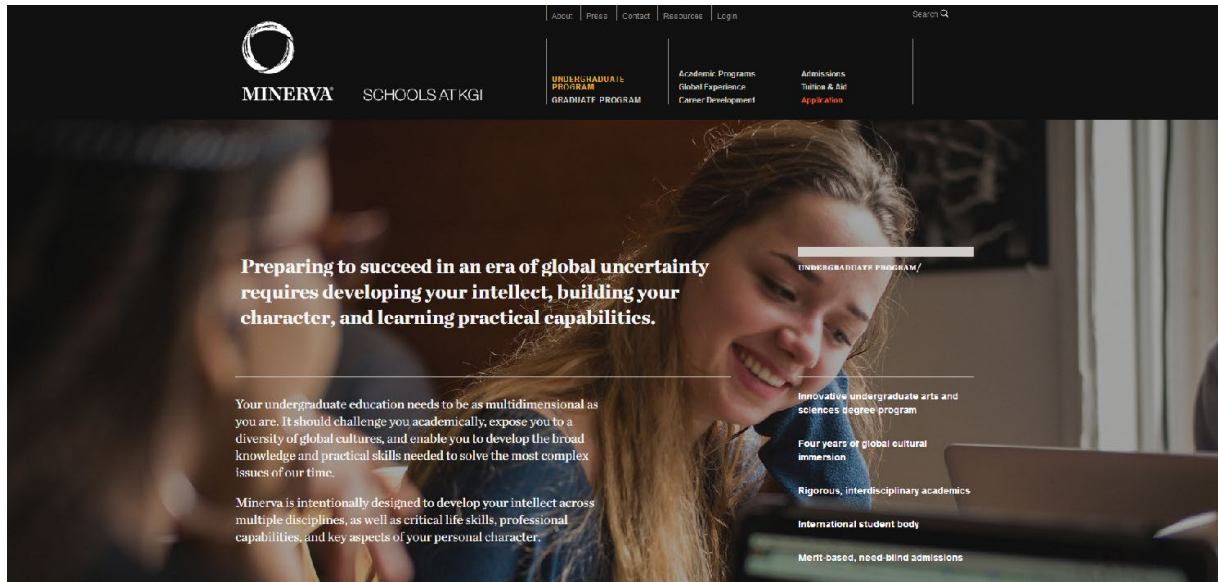
グローバル教育の新星 Minerva（ミネルヴァ）

米国のエリート大学と聞いて、どこをイメージするであろうか？ハーバードやプリンストンなどのアイビーリーグ校？思うに日本人のイメージする米国の優秀な大学のイメージは、戦後フルブライト奨学金で氷川丸に乗って留学していた時代からほとんど変わっていないであろう。蔦のからまるレンガの古い建物のあるキャンパス、荘厳な図書館、といったイメージである。



図書館の建物にはあまり用がなくなった

ところが 2014 年から 1 年生を受け入れ始めた全く新しい大学が現れた。[Minerva \(ミネルヴァ\)](https://www.minerva.kgi.edu/) である。今回はこの大学の概要を大学の HP からの情報を基礎に紹介する。ここは 4 年制の学部を中心とした正規のアメリカの大学で、現在全体で 500 名程度の学生が学んでいる。



Minerva の HP より <https://www.minerva.kgi.edu/>

私は初期の段階からこの大学の動向をウォッチしてきたが、入試の難易度で大学の質を判断する傾向の強い日本人に合わせると、Minerva は全米でもおそらく最も入るのが困難な大学であろう。およそ 50 人に 1 人しか合格できない。これはハーバードなどのアイビーリーグの名門校よりもはるかに低い（これらでも 20 名に 1 人くらいしか合格できないが）。とにかく優秀な若者に人気らしい。

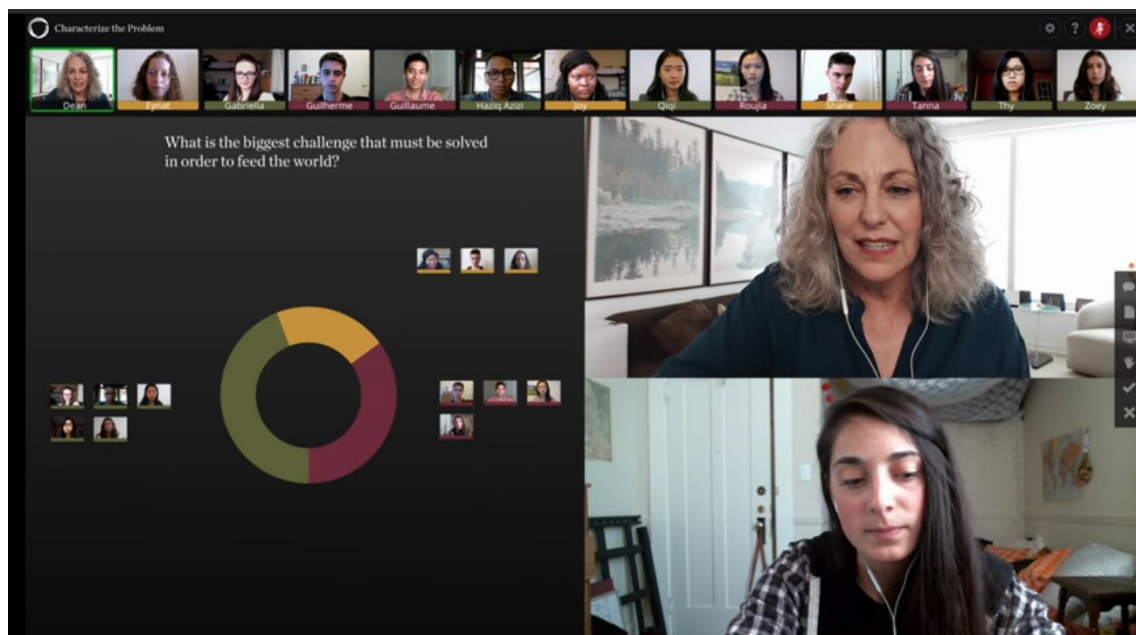
なぜそんなに人気なのか？優秀な若者ほど大学での学習の質にこだわる。そして Minerva のユニークな教育の特徴が彼らの欲求とマッチするからであろう。その特徴とは 1) 授業がオンライン、2) 安い授業料、3) 全寮制しかも多文化な学生、4) 在学中に世界 7 都市に住む、5) 都市に密着したプロジェクト、である。鋭い読者ならすぐ疑問を持つだろう。なぜオンラインの大学なのに全寮制なのか？なぜ全寮制なのに世界 7 都市に住むのか？ などなど。「普通」の感覚ならそんな疑問がわく。その「普通」を打ち破っていることにこの大学のユニークさがあるので、以下項目ごとに見ていこう。

1) オンライン授業

Minerva の授業はすべてオンラインのセミナー（日本の大学のゼミのような形式）で、1 クラス 20 名以下で対話を中心に進められる。学生は物理的にどこにいても自由だ。

教師はセミナー中にどの学生がどれだけ発言しているかをリアルタイムで知ることができるし、意見の違う問題などでは投票を行ってグラフを作り、それを学生に見せ、それをもとに議論を展開させていくこともできる。またグループ分けをして、グループでのディスカッションの後、それぞれから発表させることもできる。実はこれらの機能はオンラインの授業のプラットフォームとしては一般的なものである。

オンライン授業の様子は動画が公開されているのでそれを参照されたい。



Minerva の Youtube 動画より <https://www.youtube.com/watch?v=Dd7s8tCSDHE>

つまり教師は少人数の教室で行うようなことはできるし、発言等の割合を数値化・視覚化するのはオンラインだからこそできることである。また学生も 20 名程度しかいないので、黙ってそこにただ存在しているというわけにはいかない。必然的に毎回の授業に臨むには相応の準備をすることになるだろう。

運営側からすると、世界のどこにいてもオンラインの環境さえ整えていれば質の高い教師を確保できる（これはとても重要）。教師の側でも質の高い学生を教えることは刺激になるだろうし、Minerva で教えた経験はキャリア上有利に働くであろう。何より学生にとっては教師が世界のどこにいても関係ないので、質の高い教師の質の高い授業を受けることが可能になる。

ただ注意すべきは授業の科目がいわゆるリベラルアーツであり、実験や解剖が必要な、いわゆる理系の専門科目は履修出来ないことには注意が必要だ。

2) 安い授業料

アメリカの名門と言われる大学は歴史的に私学であることもあり、授業料が高いことでも有名である。アイビーリーグと呼ばれる東部 8 大学や、そのほかの全米の有名大学の学部は、年間の授業料だけで最低 500 万円から 600 万円かかるのが普通である。このほかに生活費や遊興費がかかるわけで、年間 1000 万円以上の予算がないときついだろう。いくら奨学金が（日本に比べて）充実しているとは言え、アメリカ人以外の外国人には制限があるし、親にとっては重い負担である。また返済の義務のある奨学金を借りることのできた学生も、日本以上に返済の負担が大きく、社会に出て実質マイナスからのスタートとなることがほとんどだ。

ところが Minerva では授業料は年間 150 万円程度、生活費を含めても年間 300 万円程度と、アメリカ人が自分の住む州の州立大学に行くのと同程度かより安く抑えられている。またそれでも資金の足りない学生には 4 年間で 2 万ドルを上限に低金利で貸出し、また在学中の仕事を紹介し、それでも足りない分は全額を大学が補填する、ということである。とにかく経済状態に関わらず優秀な学生を入学させることを第一としているようだ。

3) 全寮制しかも多文化、4) 在学中に世界 7 都市に住む、5) 都市に密着したプロジェクト

この 3 つは密接しているのでひとまとめで説明しよう。Minerva では世界 40 カ国程度から学生を受け入れて寮生活をさせる。北米出身の学生は 23% しかおらず、欧州 22%、アフリカと中東 16%、ラテンアメリカ 10%、アジアが 29% と多様な学生の構成だ。共同生活自体が貴重な多文化環境である。さらに彼らは 4 年の学部生活のうち、初めの 1 年こそサンフランシスコの寮を拠点に学んでいくが、その後は世界の 6 都市に設置された大学の寮に移り住みながら学んでいく。2019 年の大学の HP には 6 都市としてロンドン、ベルリン、ブエノスアイレス、ハイデラバード（インド）、ソウル、台北が紹介されている。

またオンラインでの授業と並行して、その時点で住んでいる都市の問題を考察したり、現地の自治体や NPO、企業との連携で、現実の問題に関わるプロジェクトやインターンシップに取り組むことが求められる。

大学の HP には多くの学生の経験が掲載されている。例えばバングラディッシュ出身の女子学生は印象深かった経験として、サンフランシスコのホームレスの多い地域で、かつてドラッグを売っていたホームレスが市民活動のリーダーとなってホームレスの福祉の改善を図っているプログラムに関わったことをあげている。またアメリカ出身の男子学生は、ソウルのベンチャー企業でブロックチェーンのプロジェクトに関わったことを有意義であった経験としてあげている。

このようにして、学生は 4 年間で 7 都市を経験し、きわめて多文化な環境で学生寮生活をおくり

ながら、各地でリアルな問題にも触れ、それらの改善策に取り組むことを求められるわけである。

このような環境を経て、学生たちは自分の頭でクリティカルに物事を考える習慣をつけるだけでなく、文化の多様性や多文化間でのコミュニケーションの仕方、また教室の中だけでは学ぶことのできない現実社会の矛盾や対立に触れ、また自分は何者かといったアイデンティティの形成に直面し、その上で「グローバル」を各自の頭の中にマッピングしていくこととなる。

ではそんなカリキュラムで実際に学生の学びには成果（実はこれもいわゆる「お勉強」の成果を測るのが主軸で、いろいろ欠点はあるが）は出ているのだろうか？

米国には [CLA+という標準テスト](#)があり、これでは大学学部での一般的な学習の成果である批判的思考力や問題解決力、また文章表現力などを測定するペーパーテストなのだが、Minerva の学長の大学ブログへの [2017 年 10 月 10 日の書き込み](#)は面白いので紹介しよう。

これによると 2016 年秋に Minerva の 1 年生は、CLA+に参加した大学の 1 年生全体のトップ 5% に位置していた。それから 8 ヶ月後の 2017 年春のテストでは Minerva の 1 年生は他の大学の 4 年生と比べてもトップ 1%の成績を収めた。Minerva の 1 年生の平均点は、その時 CLA+試験に参加した他のどんな大学の平均点よりも優れていた、ということだ。

何しろ 50 名に 1 人しか合格させないので、初めから成績優秀な学生であることはもちろん、伸び代があると判断される学生を選んでいるのだろう。また、オンラインがゆえに優秀な教師を世界中から動員できるという理由も大いにあるだろう。しかしそれだけだとはい到底思えない。きっと何かスゴイことをしているのかもしれない。

では具体的に Minerva ではどのようなカリキュラムを提供しているか、特に 1 年目を見てみよう。

Minerva はここにおいてきわめて現実的な取り組みをしている。すなわち今の時代は知識は豊富にあり簡単に入手できる。「薔薇の名前」の時代じゃあるまいし、知識はもはやコモディティなのである。コモディティという言葉に慣れない人は電卓やテレビをイメージしてほしい。これらもかつては珍しく高級なものであった。しかしテクノロジーの進歩により大量に安価にだれでも持てるものになった。それと同じことがそれでインターネットの到来により知識でも起こっているのだ。したがって Minerva ではそんな知識を暗記するのではなく、批判的にまた創造的に考える、効果的にコミュニケーションする、そして他者と上手く協業する、といったところに教育の重心が置かれている。

特に一年生目は Habit of Mind (ものの見方の習慣、とでも訳そうか)、を習得することに費やされ

る。4 コース 32 単位を受講することになるが、これらは 2 年以降の専門科目を学んでいく上での考え方のエッセンスをまとめてあるとのことである。これが故に CLA+試験でも、いきなり他大学の 4 年生よりも優れた成績を出すことができるのだろう。

それらの科目を簡単に見て行こう。

a) Formal Analyses (理論分析)

クリティカルに考えることを学ぶ。論理学や統計、数理的思考など。俗にいう演繹的な考え方だろうか。

b) Empirical Analyses (経験的分析)

クリエイティブに考えることを学ぶ。自然科学や社会科学を貫く考えかたを学ぶ。帰納的な考え方だろうか。

c) Multimodal Communication (多形態コミュニケーション)

効果的にコミュニケーションすることを学ぶ。スピーチやグラフや図の見せ方、デザインなども学ぶ。

d) Complex Systems (複雑系)

効果的に協業することを学ぶ。多くの変数の中で人はどのように機能するか、グループのコラボレーションやネゴシエーション、リーダーシップについて学ぶ。

ちなみに筆者も学部ではいわゆるリベラルアーツの教育を受けてきたが、ここまできれいに分析・分類されていなかった。どちらかというと、ここに哲学や歴史や文学が多く混ぜ込まれていた伝統的なものだったと記憶している。またグループ内での協業やリーダーシップについては全くなく、もっと個人競争的なものであり、このあたりは当然時代の影響を受けているのだろうが、これを現在の日本の大学の一般教養カリキュラムと比べてみて欲しい。日本ではほとんど全ての場合で、伝統的な科目の提供を主軸とするサプライヤーサイド＝大学都合になっていることが分かるだろう。そんなことより、まずは通底する頭の使い方を教えた方が効率的・効果的であると、Minerva の CLA+の結果は示唆しているだろう。

そして 2 年目以降は、世界各地を巡りながら専門科目を取り始めることとなる。2 年目は **Direction** と呼ばれ、自分の学ぶ方向性を決める、3 年目は **Focus** と呼ばれ専門を深める、そして 4 年目は **Synthesis** とされ、学んできたことを統合し、4 年間の学びを論文や映画や小説などのプロジェクトとしてまとめ、最後にサンフランシスコに戻って関係者の前で発表することになる。

おわりに

欧州にはエラスムス計画というのがあった（いまでも拡充して継続中）。これは 15-16 世紀に（欧州の）諸国を遍歴し、学びかつ教えたロッテルダムの人文主義者エラスムスのように、欧州の学生が欧州圏内で大学を自由に移動し、「欧州人」となるように意図したプログラムを主軸としていた。中世の欧州の広がり、現在の世界に匹敵したであろう。そして **Minerva** の取り組みは、グローバル人材を育成しようとするエラスムスを超えた試みにも思える。ただ **Minerva** の取り組みでは、例えばイスラム圏やアフリカがすっぽりと抜けているが、したがって真にグローバルと呼ぶには十分なバランスとは言えないかもしれないが、これは治安や生活インフラの問題で仕方ないのかもしれない。例えば、巡る都市のひとつでイスラム系の人口の多いところで、イスラム側からの世界の見方を学ぶことでもある程度補完できるだろう。また基本的に全て英語で学んでいるので、いろいろの都市を巡るとは言っても、現地の声は英語を通してしか聞こえないわけで、その過程で非英語の言語で話される生の声は英語の使い手のフィルターを通して変換され伝わってくる。例えばブエノスアイレスでは現地の生の事情を英語で議論できるほどのアルゼンチン人との接触になるわけで、このあたりは日本の事情を英語で発信しているジャパノロジストのレベルを考えていただければ、おのずと限界があるのが判るだろう。しかし、そのような弱点を考慮しても、学部学生としては、類まれな多文化な環境でリアルな経験を得られるのではないだろうか。

多くの日本の大学が「グローバル」人材の育成を標榜するが、伝統的な科目を英語で教えることもままならず、またアウトバウンドでは 1 年程度の 1 カ国への交換留学（それも留学先の単位はお客様待遇でほぼ確実に取得できる予定調和的な環境）程度しか実現できていない大学がほとんどだろう。さらにひどいものになると外国に自分たちだけの施設を作ってそこに隔離して留学と称しているプログラムもある。またインバウンドの学生も、特に日本の大学院だが、アジアからの留学生を取り込んで、何とか学生の頭数を揃えているような現実の中で、それを「グローバル」というのが恥ずかしくなる **Minerva** の充実ぶりだ。

こんな教育を受けるのに、もちろん英語は必須だ。ただ、だからと言ってナイーブに日本で英語学習にもっと力を入れるべきだ、などと主張するつもりはない（ちなみに英語のナイーブとは「無知」とか「世間知らず」とか「うぶ」とか言った語感である）。むしろ今時分流行りの「グローバル」なんとか学部は（特に文系のそれは）、経営的に、ロースクールより悲惨な状況になると考えている。大学院の MOT も MBA のほとんども日本では失速してきた。次は文系学部の「グローバル」関係だろう。

今回紹介した **Minerva** はもちろん米国でも特異な例である。しかし、ここまで特異でなくても日本の大学には見られないさまざまな取り組みが、世界各地の伝統校からも起こってきている。次

回は、大きな流れとなって今後世界の高等教育を変えつつある MOOCs（ムークス）を紹介したい。この仕組みが知識を急速にコモディティ化しているのだ。そしてこの仕組みが AI による自動翻訳・通訳機能と結びついたとき、日本の高等教育業界は劇的に変わらざるを得ないのだ。

「アメリカの大学の 50% は 10 年から 15 年以内に潰れる。そこには州立大学も含まれる。それが起こると思うとワクワクする」というセンセーショナルな予言をしたのは、イノベーション学の泰斗でハーバード・ビジネススクールのクレイトン・クリステンセン教授で、2013 年のことであった（日本ではほとんど全く紹介されていない！）。彼の予言が当たるとすれば、アメリカは大学大量倒産の雪崩が起きる一歩手前といった状態だろうか。一度雪崩が起きれば、その影響は当然日本にも押し寄せてくることとなる。そして今後日本の大学は、1) 世界レベルの少数の大学、2) 世界の優良大学のサテライト＝下請けとしての大学、3) 秋葉原の地下アイドル化する大学、4) 潰れる大学、の 4 層に速やかに分かれてくる可能性を考えよう。